

令和 6 年 5 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）

研究期間：2019～2023

課題番号：19KT0025

研究課題名（和文）インド洋クレオール民話におけるオラリティの多義的共存性

研究課題名（英文）Polysemous Coexistence of Orality in Indian Ocean Creole Folktales

研究代表者

小田 淳一（Oda, Jun'ichi）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：10177230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はインド洋西域のレユニオン島で採取したクレオール民話を研究対象として、語り手と聴き手の相互コミュニケーションを含めた口演における語り手特有の表現を「ローカル性」「共存性」「修辞性」「音楽性」という4種の範疇に分類し、物語世界内の叙述を含む語り全体をネットワーク可視化ツールを用いて物語要素群の多次元連鎖構造として表し、その分析を通してクレオール民話の語りにおいてオラリティを発現させる典型的な要素、さらにオラリティの次元で捉えられるクレオール性の特徴を明らかにした。またそれらを構成要素とする「クレオール民話オラリティ・オントロジー」の実装に向けて、オントロジー構成要素の階層構造を設定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民話は口承によって実践されるジャンルであるため、書記言語によって書物として残された場合、民話を持つオラリティ（口頭性）の多くの特徴を失ってしまう。本研究はインド洋西域のレユニオン島で現地のクレオール語（レユニオン・クレオール語）によって専門の語り手が語った民話口演の録音をデータとして詳細な分析を行い、オラリティを顕現させる語り手特有の表現を抽出して幾つかの範疇に分類し、それらの表現がどのように組み合わせられてひとつの語りを作り上げているかを多次元のネットワーク構造で示した。社会的意義としては、日本で初めてまとまった数のレユニオン民話を翻訳して二点の民話集を刊行したことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）： This study takes Creole folktales collected from Reunion Island in the western Indian Ocean as its research subject, and examines the storyteller's unique expressions in the oral performance, including the interactive communication between the storyteller and the audience. The expressions are classified into four categories: "locality", "co-presence", "rhetoric" and "musicality". The study then visualizes the overall narrative, including the descriptions of objects within the story world, as a multi-dimensional chain structure of narrative elements using the network visualization tool Cytoscape. Through this analysis, the study identifies the typical elements that manifest the characteristics of orality in Creole folktales, as well as the features of Creoleness that emerge in the dimension of orality. Finally, the study sets up a hierarchical structure of the elements that constitute a "Creole Folktale Orality Ontology" towards its implementation.

研究分野：文学

キーワード：クレオール 民話 レユニオン オラリティ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究課題が対象とするクレオール民話は、インド洋西域島嶼世界でフランス語系クレオール語が用いられている地域における口承による文学所産である。それらの民話は既に現地で採取したものであるが、その地域以外では辺境のクレオール語による口承文学という理由で等閑視されており、今まで行った研究では言わばその復権を意図して、原語と日本語訳の対訳形式による民話集を刊行すると共に、モチーフの分析などを行ってきた。そこで改めて確認したのは、語られている物語世界の内容とは別に、語り手が聴き手を前にして物語を語る際に用いる表現の多彩さであった。それらの多くは語り手が聴き手との間の相互コミュニケーションを意識した、オラリティを発現する具体的な特徴であり、また様々な文化が混濁している多民族共生社会で話されているクレオール語の特徴、さらには広い意味におけるクレオール性と深く関わっていることが予想された。そのようなクレオール性を民話ジャンルの口演というオラリティの実践レベルにおいて明らかにしようと思ったのが本研究課題を行う動機である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、現在でも語りの実践が盛んなインド洋西域のフランス共和国海外県レユニオン島で収集されたクレオール民話を研究対象として取り上げ、クレオール性の基底である民族的・文化的混濁がオラリティの最大の特徴である共存性とどのように関わっているのかを明らかにすることである。具体的には、今まで現地で採取した文字、音声、映像の各媒体による民話テキストの精査及び語り手への聴き取り調査を通して、語り手と聴き手の間の音声及び身体レベルの相互コミュニケーションに見られる修辞的技法やクレオール民話の口演に特有の表現をテキストから網羅的に抽出・分析し、それらの物語要素が個々の民話においてどのように組み合わせられているのかをネットワーク構造の分析によってグラフとして可視化する。次いで物語要素の多次元的な結合過程の分析によって、クレオール民話におけるオラリティの多義的な共存性を捉えることを目的とする。また、それらを構成要素とする「クレオール民話オラリティ・オントロジー」の構築と利用方法についての検討を行う。

### 3. 研究の方法

#### (1) 民話の分析

民話テキストを、物語世界内の事物を叙述する部分と、それ以外の語り手に依存する表現の部分に分け、後者についてはさらに下位の範疇を設定し、物語世界内の叙述を含めたそれらすべてを「物語要素」として、語りごとに要素連鎖としてデータを作成する。

オラリティを個別的に実現させる語り手のスタイルを比較するための第一段階として、それぞれの連鎖データにおいて、物語世界内についての叙述と、それ以外の語り手特有の表現の割合という、物語要素の分布状態についての大まかな分析を行う。

物語要素の分布状態とは異なる、物語要素の連鎖状態から民話の比較を行うために、多重整列ツールの Clustal X を用いて出力された整列結果や、それに基づく類似度から作成される系統樹の分析を行う。

物語要素の連鎖構造において、語り手に依存する表現をその下位範疇と共に多次元で表すために、ネットワーク可視化ツール Cytoscape を用いて物語要素を多次元構造で可視化して分析を行う。

「クレオール民話オラリティ・オントロジー」の構築を目指して物語要素の階層を設定する。

#### (2) 民話の刊行

今までの研究活動で収集し本研究課題でも分析に用いた民話のうち未刊行のものを出版する。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

語られたテキストを物語の内容に関わる要素、すなわち物語世界内の事物についての直接的な叙述と、物語の内容に直接的には関与しない語り手特有の表現に関わる要素に分け、それぞれの範疇に属する要素の比率を比較したところ、後者の要素の比率が相対的に高い語り手の表現はさらに下位の範疇に分類可能であることが明らかになった。そこで、語り手特有の表現に関わる要素を「ローカル性」、「共存性」、「修辞性」、「音楽性」という4種の範疇に分類した。

語り手のスタイルと「語数」との関わりを分析するために、語られた総語数と、語り手特有の要素を表す語数との相関を概観した。その結果、正の相関関係にある民話は、「語られた状況」と「語られた内容」において、それぞれの両極（均一性/多様性）に位置すること、また負の相関関係にある民話は、コストパフォーマンスの高低や、「音楽性」と「ローカル性」のマークが特徴的であることが明らかになった。

語り手特有の表現に関わる4種の範疇に物語世界内の叙述を加えた計5種の要素を「物語要素」として、ひとつの語りをそれらの要素の連鎖構造として示した。その際、物語要素に充てる記号は多重整列ツール (Clustal の GUI 版である ClustalX) を用いるために、ClustalX が処

理する核酸塩基の記号を次のように代替している：

A (ローカル性); G (共在性); C (修辞性); U (音楽性); T (物語世界内の事物)

次の図1は民話25編の連鎖データを多重整列した結果である。

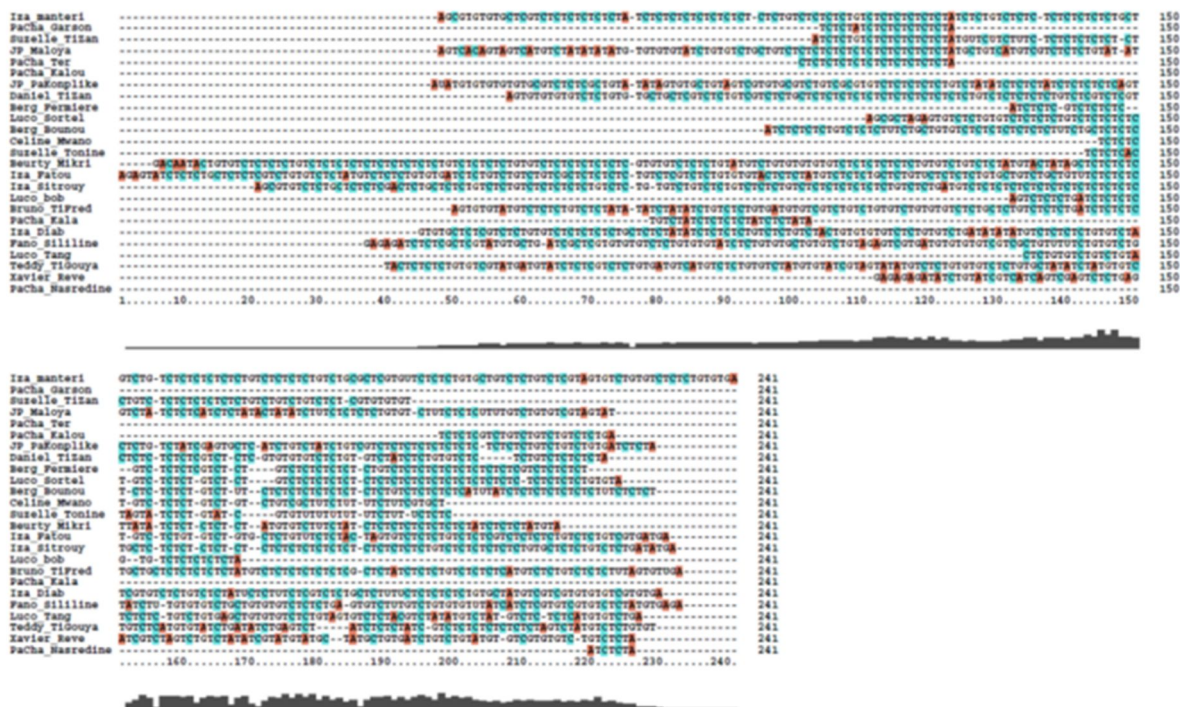


図1：民話25編の多重整列結果

この整列結果から読み取れるのは、語りの最初と最後に「ローカル性」(A) 或いは「共在性」(G) がマークされる民話が多く、これはそれらを示す定式的な掛け合いが用いられていることによる。また、語りの最初と最後に「ローカル性」も「共在性」もマークされない民話については、「音楽性」の有無と語り手の年齢に関係していることが明らかになった。

この連鎖構造において出現頻度が高い「修辞性」(C) を示している具体的な技法の分析を行ったところ、特に多用されている修辞として反復法及び列挙法が確認された。これは、J. オングがオラリティの特質のひとつであるとしている「相対的に短い単位による重畳性」がテキストの範列軸上では列挙法、そして連辞軸上では反復法として実現されることによるものと思われる。また、フランス語の文法構造及び語彙を基盤とするクレオール語のひとつであるレユニオン・クレオール語には音韻・形態の両レベルで短い単位が非常に多く、それによってこれら二つの修辞が多用されるものと考えられる。さらに、オラリティの特質としてJ. オングが他に挙げているのが「発話行為への参加性」であるが、これは語り手が聴き手を前に強調する「共在性」と密接に関わっており、オラリティの共在性と親和性を持つものと思われる修辞的技法が、擬音・擬態法、現写法、諷喩法、反語法、冗語法、引喩、詠嘆法、誇張法、設疑法、擬人法、漸層法などである。一方、一般に代表的な修辞技法と言われている隠喩法、提喩法、換喩法、重義法などがクレオール民話において余り見られないのは、所謂「転義法」に分類されるそれらの修辞を成立させている二つの辞項(喩詞と被喩詞)の関係が、語りの場で聴覚によってのみ速やかに認識しづらいことから、オラリティの共在性との親和性が低いことを示しているものと考えられる。

以上挙げた分析結果を現地の語り手にフィードバックしたところ、次のようなコメントを得た：語りをこのような形で表すことができ、それによって様々な分析が可能になるということは予想外で、通常とは異なる視点から自分の語りの「形」を見られること自体は興味深い；民話の「語数」はそれほど問題ではなく、むしろ重要なのは語りの「時間」ではないか；全体的な抑揚、つまり語り手が置く力点の配置、またそれが惹起する聴き手の関心度の揺動をこのようなデータで表せないだろうか；それぞれの民話の語数と4つの範疇が占める割合との比較は、連鎖の整列よりも興味深い等々。

ここまでの分析においては、語りの構造を、語り手に特有の範疇4種に物語世界内の叙述を加えた5種の「物語要素」による二次元連鎖構造として扱ってきたが、ある表現が複数の範疇の特徴を有する場合にはその関係性を反映できないという欠点があった。例えば、語り手と聴き手の間の掛け合いにおける定型的な短い語群のやり取りは、「ローカル性」と「共在性」を同時に表しており、またクレオール語特有の諺や格言などにおける修辞は「修辞性」と「ローカル性」を、歌詞における修辞は「修辞性」と「音楽性」を同時に表している。このような多次元性の分析を行うために本研究課題ではネットワーク可視化ツールCytoscapeを用いた。その際に、4種の範疇の下位範疇としての具体的な表現を設定し、次のような階層構造とした。

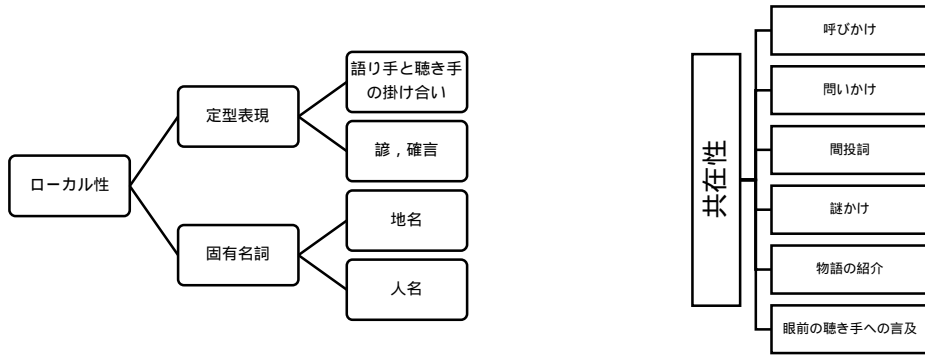


図2：下位範疇の階層構造（「ローカル性」と「共在性」のみ）

図3はこの階層構造に基づいて、ダニエル・オノレが語った「チジャンとカボチャ」の一部を、「物語内世界 Diegesis の叙述」(水色；六角形)の連鎖で表し、そこに含まれる語り手に特有の表現を表す範疇とその下位範疇をエッジで結んでネットワークとして可視化したグラフである。ここでは、上位の範疇を色と形で示し(「ローカル性」:黄色/楕円形;「共在性」:緑色/四角形;「修辞性」:赤色/三角形), その中に下位範疇の名称を入れている。

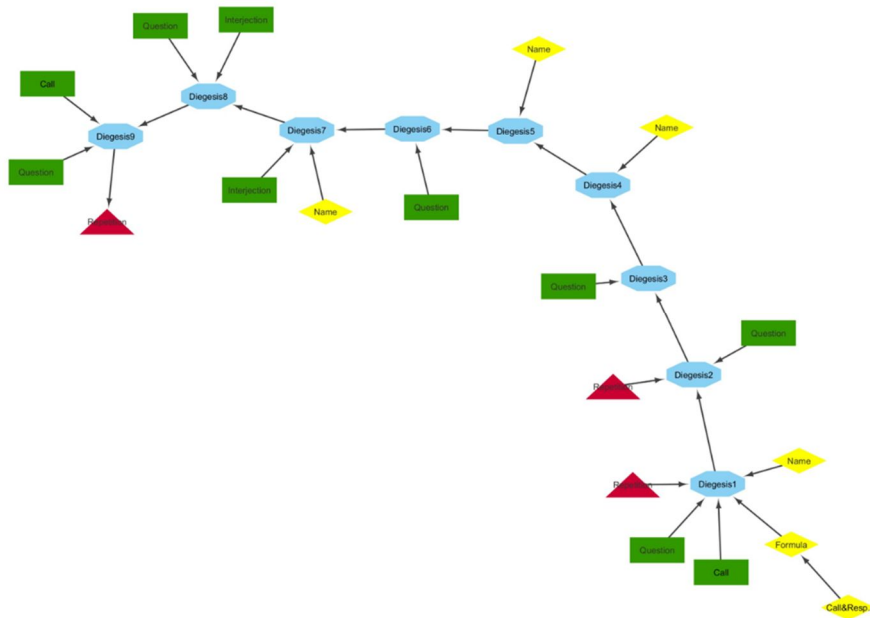


図3：「チジャンとカボチャ」(部分)のネットワーク構造

レユニオン島の各地域で専門の語り手14名から収録した延べ40話余りの民話のうち25編を対訳形式で『レユニオンの民話』(2020年3月)として、また、セーシェル国立文書館から収集したセーシェル・クレオール語による民話18編及び『レユニオンの民話』に集録しなかった民話5編を『インド洋のクレオール民話 - セーシェルとレユニオン -』(2023年12月)としてそれぞれ刊行した。

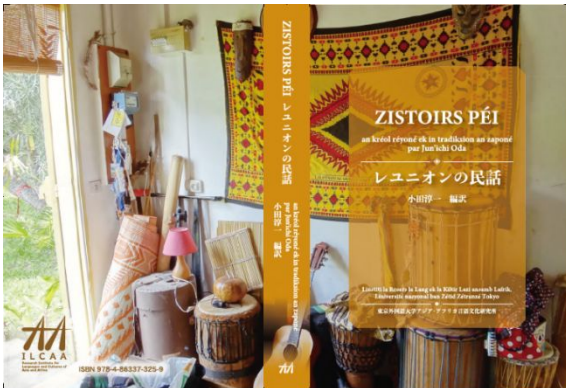


図4 『レユニオンの民話』の書影



図5 『インド洋のクレオール民話 セーシェルとレユニオン』の書影

<引用文献>

Walter J. Ong: *Orality and Literacy*, Routledge, 2012(1982).

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

国内における位置づけとインパクト

本研究課題で刊行したレユニオンの民話集は、我が国では初めて紹介される地域のものである。また研究成果の一部を2022年に開催された人工知能学会全国大会のオーガナイズドセッション(0S-17「創作者と人工知能が創る創作の未来」)で発表した際、オーガナイザの報告において、多様性に富んだカテゴリーのひとつとして本研究が扱った「民話における語り手の研究」が挙げられた(『人工知能』, 37巻6号(2022年11月), p. 814)。

国外における位置づけとインパクト

本研究課題の成果のひとつとして刊行した『レユニオンの民話』は、まとまった数のレユニオン民話の外国語訳としては初めてのものであり、現地還元することによって、これまで刊行した他地域の民話集と同様高い評価を受けた。また、上述のように本研究課題の内容と分析結果を現地レユニオン島の語り手にフィードバックした際、何人かの語り手が、現地で行われている語り部の養成セミナーで実施されているパフォーマンス実習にそれらを利用できる可能性を述べた。

(3) 想定外の事象による新たな知見

「クレオール民話オラリティ・オントロロジー」の構築を検討する過程で、他分野のデータを用いて試験的にオントロロジーを構築した報告「カート・オントロロジー構築の試み」(大坪玲子, 小田淳一, 『人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集』, SIG-LSE-C101, pp. 5-8, 2021)が人工知能学会2020年度研究会優秀賞を受賞した。これは人文科学データのオントロロジー化に汎用的な有用性があることを明らかにしたものである。

(4) 今後の展望

口演を記録した映像データから、語り手特有の表現における新たな範疇として「身体性」を設定することによってオラリティを一層精緻に記述できるものと思われる。またその下位範疇としては、例えばTVML(TV program Making Language)で用いられる次のようなtypeが有用であろう: stress(体前倒し), arm(腕振り), swing(横ゆれ), pitch(縦ゆれ), twist(身体ねじり), tiltleft(左傾き), tiltright(右傾き)等々。

「クレオール民話オラリティ・オントロロジー」は実装段階に至っていないので、語り手特有の表現における各範疇の階層構造を再考し、より深層化させることが必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小田淳一	4. 巻 C401
2. 論文標題 Cytoscapeによるクレオル民話口演の多次元構造の視覚化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小田淳一	4. 巻 -
2. 論文標題 民話の語りにおける物語要素の分布と連鎖に基づく語り手のスタイルの比較：インド洋レユニオン島の事例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年度人工知能学会全国大会（第36回）論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11517/pjsai.JSAI2022.0_1H50S17b03	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小田淳一	4. 巻 C301
2. 論文標題 動的計画法によるレユニオン民話の語り手のスタイル分析と語り手へのフィードバック	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Julien d'Huy, Jean-Loic Le Quellec, Marc Thuillard, Yuri Berezkin, Patrice Lajoie, Jun'ichi Oda	4. 巻 64(1-2)
2. 論文標題 Little statisticians in the forest of tales: towards a new comparative mythology ?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Fabula	6. 最初と最後の頁 44-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/fabula-2023-0013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 小田淳一	4. 巻 C203
2. 論文標題 民話の語り手はどのような修辞を用いるのか? レユニオン島のクレオル民話の事例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大坪玲子, 小田淳一	4. 巻 C101
2. 論文標題 カート・オントロジー構築の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田淳一	4. 巻 26
2. 論文標題 混成の小宇宙2000-2019	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 FIELDPLUS	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小田淳一	4. 巻 B903
2. 論文標題 リテラシーによるオラリティの二重の蹂躪 レユニオン・クレオル民話の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小田淳一, 小田賢	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 165
3. 書名 インド洋のクレオール民話 - セーシェルとレユニオン -	

1. 著者名 小田淳一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 457
3. 書名 レユニオンの民話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------